

半世紀前…ドイツはすでにエコだった

ごみ・環境ビジョン 21 運営委員 多田 眞

日本だって、昔は技術を盗んでいた

ごみ・環境ビジョン 21 の活動を広く伝えるツールとしてホームページや Facebook があり、私はこれを担当しています。そして一番の公報ツールはこの機関紙の「ごみっと・SUN」です。自分たちで出している機関紙ですが、私は「ごみっと・SUN」の熱心な愛読者でもあります。中でも毎号楽しみにしているのは「田口理穂のドイツのエコあれこれ」。

理穂さんは2001年1月発行の(旧)ごみっと・SUN no.22に、第1回目の原稿を書いてくれました。そこには「ドイツにきて4年半になり、現在は北ドイツのハノーファーで大学に通っています」と。まだ大学生だったのに「no.3 核廃棄物」「no.5 包装や容器のリサイクル」「no.7 電力源を選んで電気が買える♪」など、当時から貴重な情報を提供してくれています。

ごみかんHPの茶色のボタン「Rihoのドイツあれこれ」で、連載1回から読むことができますので、ぜひご覧ください。

ドイツといえば近代化学・物理の基礎を築いた学者を多く輩出し、近代科学発展の礎を築いてきた国です。時に科学も暴走することがありましたが、理穂さんの記事には、ドイツが誤りを正して平和利用へと突き進む姿が力強く描かれていて、「日本とは違うなあ、流石ドイツ!」と思うことしきりなのです。

さて話は今から45年ほど前の1970年代始めに私がドイツを訪れたときのことになります。当時日本はまだ発展途上にあって欧米に追い付け追い越せの時代でした。

今でこそ、中国などが行っている外国からの技術盗用を非難していますが、日本だって同じだったのです。新製品開発でも欧米の製品の模倣から始まり、技術を盗む行為は当たり前でした。

そのころ私は会社から新製品の開発を任されて…といってもアメリカ製の機械装置と同じ性能のものを作れということなのですが、開発期間一年という短さと、純国産では材料も満足に調達もできないという無茶ぶりの要求でした。

そんな中、会社から外国の技術を学びなさいということで、ドイツのミュンヘンで開催されている国際見

本市等を見学に行くことになりました。

会場で、興味のあるブースの写真を撮ろうとすると、展示者から「ワンショットファイブダラー」といわ

れました。同行の通訳から「日

本人は技術を盗むだけで商品を買わないんだ、と皮肉られているんだよ」と教えられ、恥ずかしい思いをしたものです。



生ごみの扱いに驚く

この時一番印象に残ったのが、会場内のごみの収集形態で、なんと生ごみとプラスチックを分別収集していたのです。当時のドイツは既に資源保護に力を入れていて、自動車会社のBMWでは乗用車のすべての部品がリサイクルされて新車の原材料になると宣言していました。

次に印象に残ったのが、ミュンヘン大学を見学した時のことです。学生食堂でランチをごちそうになり、食べ終わった食器を棚に戻す時、案内の教授が我々を棚の隣に設置されている数基並んだ幅20センチほどのベルトコンベアのところへ連れて行き、残った食材を種類ごとにそれぞれ指定されたコンベアへ流すよう指示をしたのです。コンベアはわずかに勾配があり、50センチ四方ほどのカゴに食材がたまるようになっていました。残った食材を必要としている人がいるので、混ぜてはいけないのだとのこと。

カゴはいっぱいになると小型トラックに積み込まれ、近くの施設などへ配送されるのだそうです。当日ひじきの煮たものが出ていて、残す人が多かったのですが、ちょうどコンベアの終わり近くに老婆が立っていて流しそうめんよろしくカゴに落ちる前のひじきをすくっては持参の袋に入れていました。教授によれば大学の近所で一人暮らしをしている人だそうです。彼女は私と目が合うと、にっこり笑いました。その笑顔を今でも覚えています。